

地下鉄に乗る

舟越 幸子

果てしない青青の青空に白き満月えくぼのごとく

雪消えぬ鈴鹿の山に菜の花をかざして吾はこちら春ですと

胸元に萌黄色したペリドット一粒揺れて地下鉄に乗る

鈴鹿にも淡墨桜咲いてます白き花びら光の粒に

艶やかな若葉の榊供えたる亡父の仕草わが仕草なり

純白の朝顔の蔓伸びに伸びからむ手探しふわふわ揺れる

置き去りの傘にも似たりビワの実は雨に打たれてひっそり朽ちる

十六夜の月に照らされからすり花はなまめく妖精のごと

廃工場トパーズ色の朝顔が主を待つてか背のびして咲く

庭隅の赤みを帯びたすすきの穂かぼそき茎は風のなすまま